

## 巻頭写真 日本と中国のオオバネムノキの生育環境

Habitats of *Albizia kalkora* in Japan and China

オオバネムノキは、日本、中国、韓国、東南アジアからインドにかけて分布するマメ科の落葉小高木で、本種や近縁種の化石は、日本、中国、韓国の中新世から更新世の地層から見つかっている（伊藤ほか，本号 pp. 3–13）。日本における分布域は、九州の暖温帯域の沿海地で、宮崎県の延岡市南部から日向市、鹿児島県トカラ列島中之島が知られているほか（伊藤ほか，本号 pp. 3–13），2016年に長崎県五島列島福江島でも発見された（中西ほか，2016）。近年、宅地開発等により生育地が減少し、環境省の絶滅危惧種（EN）に指定されている。宮崎県延岡市鯛名町（標高10 m）では、海に面した丘陵地の崩れやすい急傾斜地の南向き斜面中部から上部にかけて、樹高8 m程度のオオバネムノキが数本生育していた（写真1）。アラカシ *Quercus glauca*，スダジイ *Castanopsis sieboldii*，サカキ *Cleyera japonica*などの常緑樹の生育する人里の林縁に、ヤマハゼ *Toxicodendron sylvestri*，アカメガシワ *Mallotus japonicus*，イヌビワ *Ficus erecta*などの落葉樹とともに生育していた。周囲には造成地やスギ植林、竹林がある。日向市幸脇では、波打ち際から高さ5 mほど上の南西向き急峻な崖上に、海に向かって張り出すように樹高5 m程度のオオバネムノキがアカメガシワ、イヌビワ、タイミンタチバナ *Myrsine seguinii*とともに生育していた（写真2）。周囲にはスダジイ、タブノキ *Machilus thunbergii*，クスノキ *Cinnamomum camphora*などの常緑樹の自然林が保存されており、権現崎公園となっている。

一方、中国大陸では、海南島の亜熱帯域から黄河下流域の冷温帯域にかけて、内陸部にまで広く分布している。揚子江中流域では、林道沿いの二次林の林縁に比較的普通にみられる。重慶市黔江区馬喇鎮 Mala-zhen 米酒坨 Meichoda 付近（標高1080 m）では、*Pinus massoniana* 植林に接した林道脇の低木林内に、樹高1～2 m程度のヌルデ *Rhus javanica*



写真1 宮崎県延岡市鯛名町の生育地。丘陵斜面に突出した樹冠がオオバネムノキ。撮影：伊藤彩乃。



写真2 宮崎県日向市幸脇の生育地。波打ち際から海岸崖の上部を望む。奥の常緑低木から突出した樹冠がオオバネムノキ。右手前がノジギク。撮影：伊藤彩乃。



写真3 重慶市黔江区馬喇鎮米酒坨付近の生育地。Pinus massoniana 植林の下の低木林内にオオバネムノキが分布する。撮影：百原新。



写真4 重慶市のオオバネムノキ。2回羽状複葉。撮影：百原新。



写真5 重慶市のオオバネムノキの羽片と小葉。撮影：百原新。

やカバノキ属 *Betula alnoides*, ナラガシワ *Quercus aliena*, イザヨイバラ *Rosa roxburghii* に混じって生育していた (写真3)。この地域は湖北省、湖南省からのびる武陵山地西部の石灰岩地帯で、付近にはチュウゴクユリノキ *Liriodendron chinense* の自生地がある (Tang et al, 2013)。

日本と中国のオオバネムノキの生育地は、崖や林縁などの明るい環境であるという点で共通している。しかしながら、日本では沿海地の温暖な場所に分布が限られているが、中国では冬の気温が寒冷な内陸部にも広く分布している。これは、それぞれの地域での環境適応の歴史が異なった結果だと考えられる。日本のような島嶼域では、第四紀の環境変化の中で分布域が縮小し、海沿いの限られた場所で細々と生育を続けたが、中国大陸では、幅広い環境に適応して分布域を広げ、人為による攪乱によってできた明るい場所に侵入し、ごく普通にみられるようになったのであろう。

#### 引用文献

- 中西弘樹・出口敏也・上田浩一。2016。長崎県五島で発見されたヒロハネムとオオバネム。長崎県生物学雑誌 79: 59-61。  
Tang, C.Q., Yang Y., Ohasawa, M., Momohara, A., Mu, J. & Robertson, K. 2013. Survival of a Tertiary relict species: *Liriodendron chinense* (Magnoliaceae) in southern China, with special reference to village fengshui forests. *American Journal of Botany* 100: 2112-2119.

(伊藤彩乃・百原 新 Ayano Ito, Arata Momohara)